

国際教室における課題と実践

山口市立平川小学校 教諭 辻本 紳一郎

(平成8年度派遣 オーストラリア パース日本人学校)

1. 平川小学校の国際教室

本校には、現在7か国（インドネシア・アフガニスタン・モンゴル・ラオス・フィリピン・ベトナム・アメリカ合衆国）から来た外国人児童たちが在籍しているが、入国に伴う編入学と帰国が年間を通して繰り返されている。滞在期間によって児童支援のニーズが異なるため、ここでは日本語指導に加え、児童の生活指導、また帰国後につながる学力保障が必要となっている。

児童の指導は毎週各学級から出される週の学習予定に基づいて作成する独自の学習予定表をもとに行う。朝時間は、学級担任と日課変更有無の確認をするとともに、その日のどの時間に誰がどの児童支援に入るかを調整する作業から始まる。その上で、通釈支援者の割り振りの確認、保護者からのメール連絡の確認、QRコードを通した出欠・遅刻の確認をする。しかしながら、外国人児童たちは連絡なく欠席・遅刻することが少なくないため、家庭への連絡や必要に応じた家庭訪問も行っている。

2. 国際学校としての役割

外国人児童たちの文化や言語、宗教などの背景は様々で、それぞれの日本語能力や生活能力などの課題も様々である。こうしたことから、彼らの支援は多岐にわたる。しかし同時に彼らは生きた国際教育のための大切な人材である。この恵まれた環境を生かすため、本校で取り組んできたことの概要を記したい。

(1) 保護者を講師にした総合的な学習の時間

外国人児童の保護者たちは、児童が生まれ育った国の生活や文化を知るための情報を多くもっている。そこで、6年生の総合的な学習の時間に探究活動の一環として関わっていただくことにした。保護者たちは本校の子どもたちにとっては大切な地域人材でもある。彼らの多くは母国の紹介に意欲的であり、プレゼン力も非常に高い。何よりもこちらのニーズにきちんと応えてくれることが素晴らしかった。母国に対する愛国心の強さも感じた。

①ラオスの話

ラオスから来ている児童の保護者は、ラオスの位置や人々の様子、日本人との肌の色の違い、ラオスの言葉、ラオスのお寺や観光名所、行事、ラオスの気候などについてのプレゼンをしてくれた。

ラオスがGreen Countryと呼ばれるくらい緑豊かな国であること、山口市がラオスのように緑豊かで素敵な町であることも話してくれた。また全国で同様の義務教育を受けることができるという日本の教育環境の素晴らしさについても話してくれた。

「教育が未来をつくる」という素敵なメッセージもいただいた。

「日本で驚いたことは何ですか？」という子どもの質問に対し、「独居老人が多いこと」と答えられたことが印象的であった。ラオスでは、三世代が同居する文化が定



着しているからとのことだった。

②モンゴルの話

ドラマ「VIVANT」のロケ地にもなったモンゴルから来た児童の保護者は、国全体の遊牧民数の多さや、首都ウランバートルは標高が1,350mで最低気温がマイナス40℃になることもある「世界で最も寒い首都」であること、ビルがあるのは、ウランバートルだけで、モンゴル人たちのほとんどは広大な草原でのゲル住まいであることなど興味深い話をしてくれた。



本校の子どもたちは、ゲル（直径4mほどの円形で、中央に柱があり、羊の皮で作ったフェルトをかぶせて作られた移動式住居）で住む家族みんなが1つのマットレスの上で寝ることや、トイレやお風呂がないことに驚いていた。

③インドネシアの話

インドネシアから来ている児童の保護者は、世界最大のムスリム人口を有する国家であるインドネシアが1万7千を超える島からなる国であること、300以上の異なる民族がともに暮らす民族的多様性を持つ国であることなどを話してくれた。それぞれの島の人々の習慣・伝統文化も風土も、自然環境も多種多様で、島を渡ると違う国だと思うくらいだと言う。



その他に、インドネシアの文化である影絵やジャワのダンス、バチックの文化、インドネシアでは揚げナマズが人気であること、食事には右手を使う文化があり左利きの人も食事には右手を使うことなどを話してくれた。

④フィリピンの話

フィリピンから来ている児童の保護者からは、7,641の島々からなる島国であるフィリピンでは、北と南の島では方言が大きく異なり、双方の言葉が通じないこともあることや、国旗の意味、竹の繊維で作られる伝統的な服やアドボやシニガンなどの代表的な料理、デザートとして有名なハロハロなどの話があった。一匹の豚を丸焼きにするレチョンの写真には子どもたちも驚いていた。フィリピンで人気の遊び「パティンテロ」や「ルクソン・トニク」も実演してくれ、子どもたちは興味津々であった。



保護者からは「世界にはいろんな当たり前があることを知ってほしい。そして、世界に心を広げてほしい」という話があった。まさに国際教育の大事な視点である。

(2) 地域の生徒をまじえた交流会

冬休みには、本校校区内にある平川中学校や西京高校の生徒も交えた交流会を開き、インドネシアから来ている他の児童の保護者に母国のプレゼンをしてもらった。

保護者は、どうして自分が山口市に来たのか、これまでの人生や山口市との出会い、日本とインドネシアとの違い、学校制度や人気のお菓子やインドネシアのコンビニの様子（動画）インドネシアにおけるマンガ文化や日本食などの日本文化の浸透度などについて話してくれた。山口市の観光アンバサダーとして活躍する保護者ならではの興味深い話であった。



こうした交流を通して、子どもたちが「人を通して」外国を理解したり、互いの違いや共通点を見つけたりすることはとても有意義なことだと考える。身近に外国から来た友達や保護者の方々が多くいるという平川小の「当たり前」が「とても恵まれた環境であること」に気づいてくれた子どもも多かったと思われる。また、こうした交流は、「国際学校」である平川小を核としたコミュニティスクールの新たな形や、地域の教育力を生かした教育活動の可能性の提案としても価値付けたい。

(3) 帰国児童とのオンライン交流

年度途中に母国に帰国した児童たちと本校の子どもたちとのオンライン交流を行った。

① バングラデシュ児童との交流 1

帰国した5年生児童は、首都ダッカに住み自宅マンションから交流会に参加してくれた。バングラデシュの休日は金曜日と土曜日であるため、交流会は金曜日に行った。



彼女の学校（女子校）は10階建てのビルで、ダッカに5つのキャンパスがあり、5つのキャンパス合わせて約33,000人の生徒がいるという。彼女の通う本校だけで生徒数は約7,000人。山口県内で最大規模の平川小の子どもたちもこの人数にとっても驚いていた。学校には午前中に通う生徒と午後に通う生徒がおり、彼女は午前中の生徒だと言う。

バングラデシュは安全でないため、一人で外を歩くことができないため、いつも車で登下校をしていることや、交通ルールを守らない運転手が多く、道路がとても危険であることなど、日本に住んだ経験のある彼女ならではのバングラデシュの感想を語ってくれた。

本校の子どもたちからのリクエストで、彼女の家の中を見せてもらおうと、日本から持ち帰った物があちこちに見られた。彼女が本校で使っていた筆箱や水筒に子どもたちからは「懐かしい！」という声があがった。

② バングラデシュ児童との交流 2

同じく首都ダッカに住む児童との交流である。バングラデシュには日本のような公園がないため、ほとんど家の中で遊んでいることや家ではバングラデシュの本に加え、日本語の本も読んでいること、それは日本語を忘れないようにするためであることなどを話してくれた。

また、家の周りに多くの車が走っていること、さらにその車のほとんどは交通

ルールを守らないことなど、日本がいかに安全な国だったかも伝えてくれた。

彼女が好きな食べ物は、ビリヤニ（鶏肉や羊肉、様々な香辛料を使用して作られる炊き込みご飯）とボルハニ（サワーヨーグルト、塩、ミントやマスタード、香辛料で作られる飲み物）だという。異国の食べ物に子どもたちも興味津々であった。



交流会の最後には、2年5組の子どもたちが「世界がひとつになるまで」を歌い、バングラデシュ語で「ドンノバード」と言ってお別れをした。

③ネパール児童との交流

5年生クラスに在籍し、ネパールに帰国した児童である。彼女も他の2人の児童と同様に日本を去ることをとても寂しがり、母国に帰国した後も日本に帰りたがっていたため、今回の交流をとても楽しみにしていた。交流の開始は午前9時すぎであったが、オンラインで画面に出てきた児童の背景は真っ暗。現地時間では午前6時すぎだったからである。子どもたちは時差を実感したようだ。

ネパールの児童は、本校の子どもたちの質問に答えながら、自分が通っている学校が16年生まであってクラスの人数が37名であることや、交流当日の気温が28度であること（日本は真冬）、ネパールでのおすすめの場所がヒマラヤであること、日本から持ち帰った海苔を使って作るおむすびが大好物であることなどを話してくれた。また、子どもたちからのリクエストに応じて家の外の様子も見せてくれた。



交流会の最後には、彼女が大好きだった日本の歌「花は咲く」をみんなで歌った。ネパール人児童が感動している様子が画面から伝わってきた。これも温かくて素敵な交流会となった。

3. ネットワーク構築と実践

(1) 外国ルーツのこども支援ネットワーク会議

県内でも増加傾向にある外国にルーツのある子どもたちの支援は、様々な課題を抱えている。そして、学校教育の中だけで、外国ルーツの子どもたちを社会とつなげることや、彼らの生活支援を行うことには限界があり、子どもたちへのよりよい支援を期待し、令和4年度に発足したのがこのネットワーク会議である。

市内で最も多く外国ルーツの子どもたちが在籍する本校国際教室担当教員と市内在住の外国人支援を行っている「ひらかわ風の会」の事務局長が発起人として、市民活動団体や大学、行政を含めた関係機関にネットワーク構築を呼びかけたことによりこの会議は始まった。

現在は、約3か月に1度のペースで会議を開催し、学校現場における外国人児童教育の現状や課題を踏まえ、外国人児童教育に関わる団体等がどのような形でよりよい支援をすることができるかについて情報交換を交えて話し合っている。

様々な外国人児童教育に関わる諸団体が連携することにより、これまで様々な立場で外国ルーツの子どもたちに関わっていた参加者が外国人児童教育の実態についてより深く理解し、同じベクトルで彼らの教育支援や生活支援を行うことが可能になると考えている。

(2) 外国ルーツの子ども支援研修会

ネットワーク会議の中で出たアイデアを基に、有志のメンバーが実行委員会となり企画した研修会である。今回の研修会は、教職員や学習ボランティアといった外国ルーツの児童生徒を支援する関係者を対象に、支援の質の向上及び支援者同士の交流を目的としたものである。研修会を通して支援者が必要な知識を得ると同時に、多様な立場の支援者とつながることで、当該児童生徒により質の高い支援を提供することができるという考えをもとに企画した。



研修会開催にあたってのシステムを整えるため、「外国ルーツの子ども支援実行委員会」を立ち上げ、「山口県新たな時代の人づくり推進ネットワーク」にも団体登録した。併せて令和5年4月1日施行の会則も作成した。

研修会は、8月22日に山口県立大学で開催した。日本語指導に関わる教員や団体、大学職員など50名以上が参加、さらに14名がオンライン参加するという研修会では、日本語指導に



における実践や課題についての報告、ムスリム児童が食べることができるお菓子探しの活動を通じた異文化理解、それぞれの立場ごとの分科交流会などが行われた。本校の外国人保護者5名と児童4名もゲストとして参加し、大変盛況に終わった。

4. オンライン日本語指導

県立大学の学生による外国人児童対象のオンライン指導である。本校児童2名が参加したこの学習から学んだことを以下に記したい。

(1) 指導上の工夫

- 外国人児童の多くは視覚からの情報に頼っている。イラストや写真を活用した資料提示はこうした児童の実態に寄り添うことができる。しかし、日本語を発話させる場面でイラストなどの利用をすると、児童はほぼ日本語を頭の中で使わない。画像を提示する場면을工夫する必要がある。たとえば、「イラストを見て、それを日本語の文章にして相手に伝える」といった学習も考えられる。
- 新出言語は理解しにくいいため、言語をイメージできるイラストなどが提示されることが効果的である。
- 多くの外国人児童は、日本語が分からなくても、聞こえた音をそのまま繰り返すことが得意である。その場合、ほとんど児童は文字をイメージしていないため音と文字

を繰り返し往復させる学習が大切である。そして、例文を見せて読ませる活動から例文を見せる活動へと上手に移行していくことで学習効果を上げる。

- 指導者がゆっくり・はっきり、そして語を切って話すことで、児童は日本語をより正しく聞き取ることができる。また、児童への声かけを意識し、児童の反応を確認し、それをしっかりと価値付けながら授業を進めることも大切である。
- 指導者の問いに動作で答える場合には、指導者がモデルとなる動作を示すと理解しやすい。指導者が複数いる場合には、子どもに発話させる前にデモンストレーションで例を見せると、さらに分かりやすい。

(2) 授業の流れについて

- 教科書がない授業では、学習に対して不安がる児童がいるため、その日の授業の目標を伝えてから授業を開始することが大切である。また、キーセンテンスを提示してから学習を始めると、授業の流れを大まかに把握でき安心して学習に取り組むことができる。
- 児童にとって身近な話題を取り上げることや、前時の学習内容（既知の学習内容）から授業がスタートすることで、これまでの学習をどれくらい理解できていたか、何ができていないかの確認ができる。また、何よりも「できること」から授業がスタートすると、その授業に対するモチベーション（できそうだ、という気持ち）も高まる。
- 授業内の話題を多く広げすぎると、学習者が目標にたどり着くことができないことが生じる。そのため、まとめの段階で学習者がこの授業で何を身につけたのかが分からなくなることがある。最後に学習者がどのような言葉を獲得できるのかをイメージしてから指導内容を組み立てるとよい。
- 教えたことと、学習者が学びたくなるような内容とのバランスをとることが大切である。

(3) 言語理解への支援

- ロールプレイ形式は、児童が意欲的に取り組める。また、同じパターンの答え方ができる問いは分かりやすく、できることが増えるという意識にもつながる。
- 指導者の話を聞いた後で、「どんな内容だったか」の問いは難しい。一問一答にするか、少し的を絞った質問にする必要がある。外国人児童の多くは、ある程度は聞いて理解することができて理解していることを発話することへのハードルは高い。
- 学習者がしっかり発話する時間を確保すること。問いかけに答える際にも、「うん」「わからん」「だめ」だけでなく、文のかたまりとして発話する機会を与えたい。

(4) 子どもの日本語の修整

- 学習者が発話した後、それを正しい日本語に修正して指導者が繰り返し発話し、同時に価値付けること。
- 「単語レベル」ではなく、「文レベル」で答えさせるような工夫をすること。
- 理解できない言葉が出てきたときに、児童と会話をしながら言葉の意味を一緒に考えることでより言葉の理解が深まる。
- 外国人児童は「ない」と「いない」の区別ができていないことが多い。こうした間違いは、その場で言い直しをさせることが大切である。
- 例えば児童が絵を見て「じょうぎ」と答えた場合、絵の横に「じょうぎ」と「もの

さし」を併記するなど、学習者の語彙に寄り添った支援が望まれる。

- 語順や助詞の誤りが多いので、話そうとしている内容をすぐに把握することが難しい場合がある。それを試させるような文を使って理解を図ることもできる。
- 多くの児童は単語レベルでの受け答えはある程度できるので、少し長い文を話せるようになると助詞の使い方が曖昧になっていることが分かる。
- 助詞の学習で様々なパターンを準備することで、その理解がしやすくなる。

(5) 日本語のインプットと指導方法の工夫

- 新たな語彙をインプットする際には、児童にとって身近で汎用性の高いものから。身の回りにあるものや、教室を飛び交う言葉などを活用すること。
- 身体の部位を教える際には、言われた部位をタッチさせるなど、動作を加えることで、よりリラックスした空気が生まれる。
- 単語ではなく、文にして発話させることへの工夫を。主語や述語、です・ますを付け加えた文で答えさせると良い。
- 語と語の間にスペースを入れて提示することは、語と語とのつながりを意識させるためには効果的である。

(6) 子どもの実態を知ること

- 「好きな○○」の部分を膨らませると、児童が知っている語彙をチェックすることができる。
- 日本で生活する児童たちは、生活上のルールをある程度理解しているため、概念そのものを改めて教えるよりも、そこに付随する日本語をインプットする方が良い。
- 外国人児童は、物の名前は知っていても、動作を表す言葉をあまり知らない。生活場面でよく使う「混同しやすい言葉（拭く・掃くなど）」はしっかり押さえない。
- 学習者がどのレベルの日本語を理解し、どこに困難を抱えているかを実際に試すような時間をもったり、実際に学校を訪問し、学習者の日本語のスキルをつかんだりしておくが良い。
- 来日間もない外国人児童は、自分の身の回りにある物やこれまでに関わった日本語を比較的理解していても、発話をするのを非常にためらう傾向にある。こうした児童の場合、発話の機会を与え、少しずつ自信をもたせるようにしている。手っ取り早いのは、「読める文章を読ませる」こと。声に出して日本語を読むことが、自分の言葉を自分の耳で聞く機会となり、指導者が児童をほめるチャンスにもなる。
- せっかく積み上げた日本語力も、帰宅語の母語環境、本人の意欲が高くないこと、また特性上の問題等により、順調に向上することがなかなかできないことがある。こうした課題と日々向き合うのが日本語指導の実情である。

5. 次年度に向けて

4月に本校に入学する外国人児童は8名。他に編入学する児童も予定されており、我々は新たな課題と対面することになるだろう。毎日が国際理解。この環境をしっかりと生かし、本校ならではの国際教育の実践を積んでいきたい。